

## 「故人を愛し直す」

詩篇 90 : 1 - 12

November.3.2024

### 詩篇 90 : 1 - 12 (パワポ)

#### Preface

毎年見る、先に召された父や母やお爺ちゃんお婆ちゃん、兄弟や我が子の写真、一緒に教会生活をしたキリストにある神の家族の写真ですが、再びこうして見ると、なぜこうも毎年寂しさを感じ、涙が出て来るのでしょうか。

召天者記念礼拝は、私たちのために天の故郷を用意して下さっている父なる神様をほめたたえる特別な時であります。

それと同時に、神のもとに先に召された方々を共に偲びながら、キリストにある復活の希望に慰められる、ある意味、寂しさを超えた喜びを実感させて頂ける尊い礼拝のひとつでもあります。でもやっぱり人の死は、愛する者たちの死は、寂しさがこみ上げてきます。

近しい人たちの死は、亡くなってもなお、私たちの感情や思いに寄り添うかのように関りを持ってきます。

今日の説教題を「故人を愛し直す」と致しましたが、先に召された故人を覚えることは、私たちにとって意義のあることのように思えます。

普段から毎日のように思い出される、決して忘れることの出来ない故人もいれば、悲しみや寂しさからは立ち直り、普段はそんなに思い出すことも少なくなった故人もいると思いますが、年に一度の召天者記念礼拝の中であっても、または日常生活の中で故人を思い出すことであっても、故人を覚えることは、私たちにとって意義深いことのように思います。

#### Part One

先ず一つ目の故人を思う意義深さは、先に召された方に改めて感謝の思いが出て来て、故人を愛し直せるということではないでしょうか。

実際に故人を思い出したり、思い巡らすと、その方の嫌なところだったり、欠点だったり、傷つけられたことだったりとか思い出されることも当然ながらあると思いますが、不思議なことに、それと同時に、またはそれ以上に、その方の痛みだったり、頑張りだったり、優しさだったり、思いやりだったり、努力だったり、または、人間としての弱さや生きることの辛さや苦しみに同調出来るような思いが湧いて来るように思います。

そして、「人間、誰も完璧な人などおらず、み～んな、良いところがあるんだ」ということに気付かされます。

私たち自身が少しずつ年齢を重ね、色々な経験を積み重ねることをもって、先

に召された方について新たに気付かされたり、再発見することが出来るようになります。

私の父は11年前、87歳という年齢で召されましたが、亡くなる半年前に、清野先生の司式と当時副牧師としておられた白石先生の立会いの下、東京足立区にある木曾路というレストランの一室で、滴礼による洗礼を受けました。

私が「牧師になるために、神学校に行きたい」と言ったら、「この親不孝者めが！ キリスト気違いになりやがって！」と激怒した父の姿からは、全く想像出来ない程に穏やかで、物腰柔らかな父の姿がそこにありました。

私が幼い頃は、毎日お酒を飲んで怒る父が大嫌いで、怖くて仕方がありませんでした。

酔っぱらってちゃぶ台をひっくり返すこともあり、その後始末を、母が泣きながら片付けている姿を見ていた私は、「このくそ親父、死んじまえ！」と小学生の頃から思っていました。

ところが、そんな父が、ある時からピタッとお酒を断ち、一滴も飲まなくなり、穏やかな姿を見せるようになったのです。

私が牧師になった時には、「お前がやってることは、金じゃ買えない尊いことだなあ」と、しみじみと喜んでくれているような言葉を掛けてくれたりもしました。

そんな父が亡くなりますと、生前の父の暴れん坊ぶりを思い出すことはほとんどなく、戦前から在日韓国・朝鮮人として嵐のような差別の中を生き抜いた父の痛みだったり、人としての弱さだったり、命を懸け命を削りながら家族を守ってくれた身長153cmの大きな背中だったり、温かい眼差しだったり、ちょっとシャイな豪快な笑い顔だったり、母の事を誰よりも恋い慕い大事にし、私の妻のことを会いたくても会えなかった生き別れた実の娘を捜し当てたかのように心から愛してくれたり、どこまでも私の味方でいたくれたこと等々、いいことばかりが思い浮かぶのです。

「そりゃ、酒飲まなきゃ、やってらんなかっただろうなあ」と思えてしまう程に、父の生き様に同情でき、愛おしく、また申し訳なく思えて仕方がないのです。

父が生きていた時は、そんな思いが私に芽生えるなんてことは想像だに出来ませんでした。父が亡くなりますと、父のことが愛おしくて、会いたくて仕方がない思いが芽生えました。

ある時、亡くなった父が私の夢に出て来たのですが、嬉しくて、父に走り寄って、「お父さん、会いたかったよ」と、わんわん泣きながら抱きしめていました。

父の欠点や良くなかったところよりも、自分とは比べものにならないくらい家族への愛や優しさや、頼もしや我慢強さや、懐の大きさなどが思い出されて、「凄いい人だったんだなあ」と思えるのです。

正に、私の中で、「故人を愛し直す、父を愛し直す」ということが起こりまし

た。

皆さんはどうでしょうか。

故人について記憶を掘り起こした時、以前とは違う、新しい良い面に気付かされることがあるのではないのでしょうか。

「ああああ、そうだった。前にはあまり気付けなくてごめんなさい。もっとそこんところを心に留め、その痛みや辛さを大切にして上げれば良かったね。今さら、何もしてあげられないけれど、本当にありがとうね」と、改めて故人に感謝し、愛し直すことが、故人を偲ぶ時起こるように思います。

死んでもなお夫婦になっていくし、死んでもなお親子になっていくし、死んでもなお兄弟になっていく。

または、変な話、死んでから夫婦になっていくこともあるし、死んでから親子になっていくこともあるし、死んでから兄弟になっていくこともあるように思います。

しかも、こういう故人を愛し直すという積み重ねは、私たち自身の人間性と言いましょうか、人としての厚みを謙虚で豊かなものにしてくれるように思います。

神に喜ばれ、人にも信頼され、多少なりとも人に寄り添えるようになり、人の役に立てる者へと成長させられていくように思います。

神を愛し、人を愛すということが、人の死を偲ぶことで、増し加えられることがあるように思うんです。

確かに聖書を見ても、もう既にこの地上での生を終え天に召された人のことや、その人の生き方や、またその人の人生を通して語られた神の言葉を思い出し、倣い、従うようにと促すような書き方をしています。

人の死は、私たち人間に、神という存在と、人の愛おしさを思い出させてくれる鍵のような役割も担っているように思います。

## Part Two

故人を覚えることの二つ目の意義深さは、自分の死、自らの死という、人として最も厳粛かつ重要な事実を覚えさせられることです。

先程、詩篇90篇を読みましたが、10節で、人のいのちの果かなさについて述べています。

### 詩篇90：10（パワポ）

この詩篇の詠い手であるモーセは、「人のいのちがいつまでも続くことはなく、振り返れば一瞬であり、また人生のほとんどが労苦とわざわいだ」という厳しい現実をよく知っていました。

こういうことを言えたのは、モーセ自身の経験によるところもあったと思いますが、それ以上に、彼よりも先に死んでいった他の多くの人たちと、その人生を目の当たりにしていたからなんだと思います。

1 節から 6 節の御言葉をもう一度読んでみます。

### 詩篇 90 : 1 - 6 (パワポ)

すべての人のいのちを司られている天地万物をお造りになられた唯一まことの神を信じていた神の人モーセにとっても、草のようにしおれて枯れて、消えてしまう人のいのちの果かなさ、人の死は、他人事ではなく、自分自身も向き合わなければならない真剣な深刻な課題であり、問題でありました。

実際、家族などの特に近い人の死は、私たち自身の死という最も厳粛かつ重要な事実を思い起こさせるものとして、神は私たちに、それを体験させなさいます。

「あなたの愛する者の死をもって、あなた自身の死をどう受け止め、どう理解し、どう取り扱っていきますか」と、神さまは私たちすべての人間に問うておられます。

聖書は、私たちに最も重要で深刻な事実を教えてくれます。

それは、「本来、人は、神のかたちに造られた存在であるがために、死を知らない者であったけれども、創造主なる唯一まことの神への人類全体の不従順の罪と不信仰の結果、すべての人に死が臨むようになり、誰も逃れられず、またその死に至るまでの人生は、労苦とわざわいの連続という厳しいものになってしまった」ということです。

では、この現実を前にして、モーセはどのようにしたのでしょうか。

「こんな人生、意味がない。どうせ死ぬんだから」と言って、好き勝手な生き方や虚無的な人生を選んだのでしょうか。

違います。

そのような生き方を、まことの神を信じる彼は選びませんでした。

では、どうしたのでしょうか。

ただ心からの信仰で、イエス・キリストの十字架の死が、私の罪の身代わりであるという心からの信仰だけで、一切の罪をお赦し下さる神の愛を信じ、神の眼差しを覚えて、神の御心を我が心として生きることを選び取って行きました。

なぜならば、自分の死後、直ちに神がご用意下さった天の御国の住まいに召されて行き、神の国で永遠に、父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神の三位一体なる神との親しい交わりのうちに生きることを知っていたからです。

「地上での残された時間を、見ても満足することがなく、聞いても満ち足りることもなく、所有してもたましいの渇きを潤すことの出来ない空しい愚かなこ

とに費やして過ごすのではなく、むしろ、如何にして神さまに喜んで頂けるように生きられるのか」と、考えました。

その思いが、神への祈りとして表れているのが、12節の言葉です。

### 詩篇90：12（パワポ）

「自分の日を数える」とは、自分に残された時間を考えること、つまり、自分の死をきちんと自覚すること、自らも死ぬ存在であり、いつの日か神の御前に立つその日をが来ることを覚えることを意味します。

いつ死んでも良いように、残された時間を神に喜ばれ、そして、死んだ後、恐れなく神の裁きの座に立ち、永遠のいのちに与ることが出来るように、「知恵の心を得させてください」と祈るのです。

### Part Three

伝道者の書7章に、人の死を覚えることの重要性について書かれていますので、一度見てみたいと思います。

### 伝道者の書7：2，4（パワポ）

人の死を覚えることは、私たちに、本質を、根本を、神の存在を、人への愛を、そしていのちの果かなさと、その果かなさを超えた永遠のいのちへの渴望や希望を思い起こさせてくれます。

死をきちんと意識しませんが、つい私たちの生き方は、目先のことしか考えない刹那的で、表面的なものに陥りやすくなってしまおうでしょう。

でもそれでは、神に喜ばれず、自分でも本当の意味での清いまことの喜びも、深い充足感やたましいの潤いもない空しいものに終わってしまい、瞬く間に時間を浪費し、気が付くと人生の終わりの断崖絶壁まで来ていた、ということになりかねないでしょう。

「そうならないように」と、かつてイエス様が、真剣に真つすぐに人々に話されたことがありました。

### ルカの福音書21：33－34（パワポ）

死を覚えること、神の前において死を、神の言葉において終わりを覚えることは、私たちを、目先のことしか考えない短絡的な生き方から守ってくれます。

救ってくれます。

昔からヨーロッパの修道院で、修道士たちが庭や廊下ですれ違う度に、言い交してきた言葉があるそうです。

「メメント・モリ」という言葉です。

「メメント・モリ」とはラテン語で、「死を覚えよ」という意味です。

つまり、死を覚えることで、自分に残された命の時間を大切にし、特に、私たちの罪の赦しのために十字架で命を献げ、死より復活された神の御子イエス・キリストと共に、神の御心を求め、御心を知ったならば喜んで従い、愛をもって人に仕え、感謝しながら丁寧に生きることを互いに励まし合ったということです。

死を覚えることは、怖いことだったり、意味のないことだったり、「どうせ死んでしまうんだから」というあきらめの気持ちに浸ってセンチメンタルになることではなく、まことのいのちに繋がる、本当は、とても積極的な深い意義があります。

### Conclusion

ここまで、故人を覚える意義について考えて参りましたが、私たちよりも先に召された近しい故人を覚えることを通して、私たち自身も自らの死を覚え、地上で残された時間を、ぜひ、神の下さる知恵によって生きる者とされたいと願います。

私たちの前に世を去り、特に、神が世に遣わされた救い主神の御子イエス・キリストを信じ歩み、今、天国で、言葉に表せない喜び、慰め、平安のうちに、父なる神の御顔を仰いで生きておられる信仰の先達たちを覚えつつ、

私たちも、苦勞とわざわいは付きまといますが、残された人生を、イエス・キリストに手を握られ、聖書の御言葉から絶えず励ましと知恵を頂きつつ、共に歩んで行きたいと願います。

お祈りいたします。

祝祷：詩篇 90：12